

政治家の失言がたびたび問題になる
政が、なぜそれが失言なのかということについて十分な議論はなされていない。

昨年11月のこと。法務大臣が地元の会合で、「国会で何を聞かれても法務大臣は『個別の事案については答えを差し控える』『法と証拠に基づいて適切にやっている』と答えればよい」と言った。この発言が国会軽視と批判され、辞任に追い込まれた。しかし、これは辞めた柳田稔氏だけでなく、自民党時代の法務大臣も使ってきたフレーズだ。

誰でも法務大臣が務まるようにするために便利だから、このフレーズが使われてきた。なぜ誰でも務まるようにする必要があるかといえば、大臣ポストが与党政治家へのご褒美だからだ。ポストを配りながら党内の支持を維持し、党首選で勝って与党の党首、すなわち総理大臣であり続けるのが自民党時代のやり方だった。党内事情で大臣が決まるのだから、法律に詳しくなくても法務大臣が務まるようにしないといけない。それゆえ便利なフレーズとして選ばれ、政権交代があっても使われ続けていたということだ。大臣ポストがご褒美であるのは官僚にも都合がよい。何も知らない大臣であれば、「よきにはからえ」と言ってくれる。

本当のことを言っただけ

民主党政権は政治主導を唱えていた

見は、何より「暴力」装置という言葉である。これはレーニンの『国家と革命』に登場する言葉であるから、元社会党員であった長官の体質を明らかにしたと言っている。毛沢東も「すべての権力は銃口から生まれる」と言っている。

軍隊が暴力組織であるとはマックス・ウェーバーも言ったことであり、そもそも国家自体が暴力から生まれたとはホッブズの『リヴァイアサン』（原著1651年）が原典である。人々、あるいは小さな部族の争いを制御するものとして王が生まれた。王は最大の暴力を有して、人々の争いを調停する。王がいなければ、人は人と争わなければならない。だからこそ王の権力は絶対であり、尊重しなければならない。ただし王は人と人との争いを調停し、人々の生命財産を保全

撮影：大隅智洋



自衛隊が暴力装置であることは疑いようがない。日本の政治に欠けているのは、権力をリアリスティックに考えることかもしれない

が、大臣がご褒美であるかぎり、政治主導は無理である。総理を中心とした政治の目標設定があつて、その実現のために各省の大臣が選ばれ、選ばれた大臣が自ら副大臣や政務官を選び、チームとして行動するというものでなければ、政治主導にはならない。鳩山内閣では一応、各大臣が目標を設定し、各大臣が副大臣や政務官を選んでいく。ところが菅内閣では、大臣が副大臣を選ぶという仕組みはなくなってしまった。小沢支持派に配る大臣ポストが不足したので、副大臣、政務官は小沢支持派に回すことになった。これでは大臣以下がチームとならず、政治主導になるはずもない。

柳田氏は本当のことを言っただけである。本当のことを本当と認めることから、進歩が始まる。政治主導は難しいが、官僚主導では何も変えることができないから政治主導と言いつつ出たはずだ。難しさをどう乗り越えるかの議論をせず失言だと騒ぐだけでは、日本はよくならない。

「問題である」という最大公約数の意見もある。

仙谷由人官房長官が11月の参議院予算委員会ですべて「自衛隊は暴力装置」と述べたことも問題になった。しかし、どこが問題なのだろうか。装置はシステム（機構）のことだという説もあるようだが、一般には機械のことを指すから、人間である自衛隊員に対して失礼であるという意見もある。

リヴァイアサンの思想は、王の絶対権力を肯定するものであるとともに、王が人々の安全を脅かしてはならないという意味では、王の権力を制限するものである。ここから王権を制度的に制限する思想としての代議制や、人権に関する考察が生まれる。ロックやベンサムは、代議制や、民意で選ばれた指導者が独裁者とならないための権力の分立、言論・集会・結社・思想信条の自由、基本的人権などの民主主義思想を発展させた。なぜイギリスにそれができたかといえば、国家は暴力から生まれたという真実と向き合ったからである。

一方、中国では、皇帝が徳を持っているから天下が平和に治まるという儒教思想が人々を支配していた。これは当然、真実ではない。天下が乱れた時、最大の暴力装置を持った人が皇帝になったただけだ。

暴力装置だからこそ向き合う

国家は暴力から生まれ、軍隊が暴力装置であるというのは真実である。だからこそ、暴力から生まれた国家で民主主義をどう守り、民主主義を守るべき軍隊をどう制御するか、という課題が生まれる。真実に向き合わなかった中国からは、自由も民主主義も産業革命も生まれなかった。中国からしかインスピレーション

THE COMPASS

【コンパス】

「暴力装置」発言を考える

政治に必要なのは 真実を探求する姿勢

●大和総研専務理事 チーフエコノミスト

原田 泰



はらだ・ゆたか ●1950年生まれ。東京大学農学部卒。経済企画庁国民生活調査課長、海外調査課長などを歴任。

ヨンを得られなかった日本もそうであった。

しかし、黒船が来て西欧の文物がもたらされたとき、日本人は日本にも自由と民主主義と産業革命をもたらさなければならぬとすぐさま理解した。真実と向き合うことができたからである。

国家も軍隊も暴力装置である。それは左翼の認識ではなく、偉大な自由と民主主義の思想家たちの認識である。左翼は、資本主義の国家も軍隊も暴力装置であると言ったが、自らが権力を持ったときには、自国民に対してさえも制限のない暴力装置となった。スターリン、毛沢東、金日成の体制がそうであり、日本の左翼はつい最近まで、資本主義国家が暴力装置であることを批判していたが、社会主義国家が無制限の暴力装置であることは批判してこなかった。真実と向き合うことができなかったからである。

「問題発言」を言葉狩りで封じるのではなく、それと向き合うことで偉大な成果を生むことを認識すべきである。

THE COMPASS